

閉塞性黄疸を呈した肝嚢胞の1例

にい がき まさ とし¹⁾ さ どう しゅう いち かり の とし ひさ¹⁾
 新 垣 昌 利¹⁾ 佐 藤 秀 一²⁾ 狩 野 稔 久¹⁾
 み やけ たつ や²⁾ しら さわ いく よ¹⁾ きの した よし かず²⁾
 三 宅 達 也²⁾ 白 澤 郁 代¹⁾ 木 下 芳 一²⁾

キーワード：肝嚢胞，閉塞性黄疸，エタノール注入療法

要 旨

症例は63歳の男性。陳旧性肺結核・気管支炎による呼吸不全にて当院循環器科入院加療中，総ビリルビン値の上昇を認めたため，精査加療目的にて内科に転科した。精査の結果，肝内胆管の拡張および肝門部に約4 cm 大の嚢胞性病変を認めた。2年4ヶ月前に他院にて指摘されていた肝嚢胞の増大による，両肝管の圧排を原因とする閉塞性黄疸と診断した。経皮経肝胆道ドレナージ術（PTCD）および経皮経肝的嚢胞ドレナージ術（PTCystD）を施行した。ドレナージ内容液は無色透明で，細胞診では悪性所見は認めなかった。後日，嚢胞へのエタノール注入術を追加した。その後，総ビリルビン値の減少が得られ，退院後も黄疸の再発は認められず，良好な経過が得られた。比較的小さな肝嚢胞でも局在部位によっては閉塞性黄疸をきたしうることを留意する必要があると考えられた。

はじめに

良性非寄生虫性肝嚢胞はそのほとんどが無症状であり，肝嚢胞により閉塞性黄疸をきたすことは極めて稀である。また既報によると，閉塞性黄疸をきたす嚢胞は平均径15 cmと大型のものであることが多い¹⁾。

今回我々は，直径4 cmと比較的小さな肝嚢胞により発症した閉塞性黄疸の1例を経験したので報告する。

症 例

症例：63歳，男性。

主訴：黄疸。

既往歴：23歳時，肺結核にて左肺上葉切除，その後輸血後急性肝炎。35歳から気管支喘息。57歳から拡張型心筋症，高血圧，慢性C型肝炎。

家族歴：特記事項なし。

現病歴：200X年2月21日，陳旧性肺結核・気管支炎による急性呼吸不全にて当院循環器科入院。入院時0.9 mg/dlであった総ビリルビン値（以下T.Bil）が，2月29日には8.7 mg/dl，3月6日には17.7 mg/dlにまで上昇したため，同7日，

Masatoshi NIIGAKI et al.

1) 益田地域医療センター医師会病院内科

2) 島根大学医学部消化器肝臓内科

連絡先：〒697-0062 浜田市熱田町1517-1